講演　【キリシタン時代から、現代の教会が学ぶこと】

※　溝部脩　司教の話（トピックス2に掲載）をもとにして、
「近畿キリシタン・シンポジウム」で話させていただきました。

「キリシタン時代から、現代の教会が学ぶこと」ということについて、しばらく語らせていただこうと思います。

さて、皆さんは、「教会」と言われたら、どういうことを連想されるでしょうか。
十字架、建物としての教会堂、牧師・宣教師、役員会・男性会・女性会などの組織、オルガンやピアノ　・・・
等々々。

昔の教会って、どうだったんでしょうか。
400年前のキリシタン時代の教会って、どんな「教会」だったんでしょうか。400年前だけではなくって、2000年前の新約聖書に記されている、初代教会の頃の「教会」って、どうだったんでしょうか。
今の教会と、昔の教会は、同じだったんでしょうか。
どういう形ですすめられていたんでしょうか。

現代の私たちが、当然のようにして持っている「教会」のイメージは、はたして、本当の教会の姿なんだろうかと、この機会に、立ち止まって考えてみたらどうだろうかと思います。

私たちは、気がつかない内に、組織的・官僚主義的になっているのではないか。今ある教会の姿を、何か本来の聖書の教えであるかのように思い込んでしまって、必死になっているのかもしれないなあ。そして、そのことは、イエス様の教え・神のみことばからは遠いものなのかもしれないなあ。そして、そのために力を失っていってしまっているのかもしれないなあ、という気がするのです。

毎日のように、人々が救われ、家族単位で救われ、洗礼を受けていき、どんどんキリシタンの数が増え、成長していった400年前のキリシタンの時代の教会は、当然のことだと思いますが、2000年前の〈使徒行伝〉の時代・初代教会の姿に限りなく、近い形になっています。

一方、現代の日本の、私たちの教会の姿はどうなのでしょうか。

４年前の2006年の11月に、“近畿福音放送伝道協力会”（近放伝）が主催者となって、「近畿宣教教会会議」という会議がもたれました。その時の基調講演で、「日本のキリスト教会の現状」ということについて、水野牧師が報告してくださいました。

2005年度、今から５年前の統計ですが、日本のプロテスタントの教会の礼拝出席者数は、27万6150人。日本の人口全体の0．22%です。1000人の内の２人ということになります。
教会数は、約7800あるのですが、10数名がつどっているという教会がほとんどで、しかも、その礼拝出席者数は10年前よりも、減ってきているのです。

受洗者数は、どうでしょうか。
受洗者数は、日本全体で8844人。受洗者がいなかったという教会は、全体の65%。実に5070の教会が、一年間に、受洗者がゼロだったのです。そして、更にいえることは、受洗はするんだけれど、受洗者のほとんどが、教会に残っていない、という現実があるのです。

将来の教会を担うべき、子ども達のための教会学校は、どうでしょうか。
全体の45%にあたる、3500の教会で、そのような働きはしていない、又は生徒がゼロというのが実情です。

日本全体で、教会そのものが、ずいぶんの数、なくなっていっています。
会員数も、減っていっています。
礼拝出席者数も、減っていっています。
多くの教会が、牧師のいない無牧の状態になっていて、一人の牧師が、複数の教会を兼任して、働いてくださっているのです。

これらのことは、日本のカトリック教会においても、同じ状況です。

この「近畿宣教教会会議」のメイン講師だった、シンガポールからお越しいただいたエドモンド・チャン牧師が、最後の集まりの時に、最後のことばとして、最後の最後、このようにおっしゃいました。
「日本は今、リバイバルがない状態です。そういう中では、日本の国に、日本の教会に、いろんな問題がおこってきます。リバイバルを求めるように！　リバイバルを主なる神に求めていきましょう！」 そのようにおっしゃったのです。

いつの時代であっても、どこの国や、どこの場所であっても、だれであっても、聖霊が生々と働いてくださる、大いなるみわざ、リバイバルのみわざが必要です。
400年前のキリシタン達、高山右近も、細川ガラシアも、二十六人の殉教者たちや多くの殉教者達も、すべてのキリシタン達は、私たちが経験したことのない、ご聖霊による、大いなるみわざ・リバイバルの経験者、リバイバルの体験者だったのです。

私が住んでおります「高槻」の町は、キリシタン大名として有名な「高山右近」が、12年間、高槻城主だった町です。右近が21歳～33歳までの12年間です。
この間（かん）に、キリシタン大名として、キリスト信仰に基づいた生き方、そして町づくりをすすめてこられました。

宣教師の報告によりますと、天正９年（1581年）、あの「本能寺の変」がおこったのが、1582年ですから、その１年前の天正９年（1581年）、２万５千人の領民の内、１万８千人がキリシタンであったと、記録されています。
２万５千人の内の１万８千人、72%になります。10人中、７人がキリシタンだったというのです。

一方、現在の日本の状況でいいますと、日本の人口・１億3千万人の内の、カトリック教会の分を合わせても、１%にもならないクリスチャン人口です。0.5%だとも言われています。先ほど申しあげたのは、プロテスタント教会の礼拝出席者数でしたが、かなり正確な数字で、０．22%でした。

400年前の、高槻の72%と、一方、１%にもならない0．５%、あるいは0．22%。一体、どこが違うんでしょうか。

３つのキー・ポイント、キー・ワードがあると思いますが、
①つめのことは、「祈りと、それに答える形でなされていった聖霊のみわざ」ということです。
②つめのことは、次々と人々が救われていきます。しかし、司祭の数は、わずかです。そのような中で進められていった「信徒を中心とした教会形成」ということです。
そして③つめのことは、キリスト教の中心・本質である「愛の実践」です。

当時の言葉では、「愛」ということばは別の意味で使われていましたし、キリスト教 / 聖書でいう「愛」とは全然違うものでしたから、宣教師たちは、別の日本語に翻訳しました。
今でいう「愛」は、「ご大切」ということばに訳しました。そして、「愛する」という動詞は、「大切に思う」ということばに訳しました。

③つめのキーポイント・キーワードは、この「ご大切 / 大切に思う、ということの実践」ということです。

1つ ・「祈りと、それに答える形でなされていった聖霊のみわざ」
2つ ・「信徒を中心とした教会形成」
3つ ・「ご大切 / 大切に思う、ということの実践・愛の実践」

この3つのことが、右近さんの頃・キリシタン時代の72%と、現代の1%未満、0．5%、あるいは0．22%の違いである、といえるのではないかと思います。

3つのこと、それぞれについて見ていきたいと思いますが、その前に、聖書に記されている根本的なこと・原則を、確認しておきたいと思います。

「使徒の働き・使徒行伝」の1章で、主イエス・キリストは、「父の約束を待ちなさい。聖霊があなたがたの上に臨まれる時、あなたがたは力を受けて、地の果てにまで、わたしの証人となるのだから、待ちなさい！」とおっしゃって、天に昇っていかれ、父なる神の右の座に着かれました。
11弟子や女性たちやイエスの母マリヤや、きょうだい達は、「みな心を合わせ、祈りに専念していた。」と、1章14節に記されています。ただボンヤリと、他のことをしながら待っていたのではなくて、祈りに専念して、約束のもの・聖霊を待ったのです。

そして2章で、「ペンテコステ・聖霊降臨の日」を迎えます。
ペテロの説教・メッセージを聞いて、この日、三千人ほどが弟子に加えられました。聖霊の働きです。降臨くださった聖霊の最初のお仕事が、三千人の救いでした。

いっきに3000人ですよ。教会堂があるんでしょうか。キリスト教会など、この時、一つとしてありませんよ。
救われた3000人に対して、教職者・牧師は何人いたんでしょうか。主イエスを裏切ったユダに代わり、新たにマッテヤが加わって12人となりましたが、12人だけです。
3000÷12＝250 牧師1人あたり、250人。

4章では、クリスチャンの数はどんどん増えていって、「男の数が5千人ほどになった。」とありますから、女性や子ども達なども正確に数えたら、1万人にはなっていることでしょう。牧師の数の12人は変わりがありませんから、 1万÷12＝830 牧師1人あたり、830人。
このあとも、どんどん増えていきます。

5章では、男も女もますます増えていきます。
6章では、非常に増えていきます。
牧師・教職者の数は、ステパノたち7人が加わって19人になります。クリスチャンの数を3万人と考えても、教職者1人あたり1500人以上ということになるのです。

キリスト教会の会堂が、どんどん建てられていったんでしょうか。急なことで、そのようなものは、1つとしてありません。牧師も、ほとんどいません。19人＋アルファの、わずかな数です。
しかし、信徒の数・クリスチャンの数は、どんどん増えていって、洗礼を受けていっているのです。

一方、今日（こんにち）の日本では、りっぱな教会堂もあります。10名や20名の教会にも、ちゃんと牧師が与えられているというような恵まれた状況です。
そのような中で、停滞して、ずっと横ばいで来ている、あるいは下降線をたどって来ている現代の日本の教会とは、何なんでしょうか。どこに違いがあるのでしょうか。真剣に考えてみたいと思うのです。

キリシタン時代を見てみますと、教会堂もありません。
司祭の数も、一番多かった時で108名。信徒の数は50万人。宣教の地域は、徳川幕府による大迫害の中、東北地方にまで、のびていっています。
広範囲に散らばった5千人の信徒に1人の司祭ということになるのです。

高山右近が高槻城主だった時、キリシタンの数は年ごとに、4千人・8千人・1万4千人という風に増えていって、先ほど申しました、天正9年（1581年）には、前の年より更に4千人増えて1万8千人。領民の人口2万5千人のうち、1万8千人、72%。10人のうち7人以上がキリシタンになっていった、キリストの弟子に加えられていった ——ということをお話しましたが、信じられないことかもしれませんが、この1万8千人のキリシタン達に対して、高槻常駐の司祭は、一人もいなかったのです。1万8千人のキリシタンに対して、司祭・教職者はゼロなのです。
宣教師たちが、時々、巡回してきてくれるだけです。

ビックリ！でしょう。しかもキリシタンの数は、この後も増えていって、領民の数の方も増えますので、キリシタンの数も最終、2万5千人という数にまでなっていくのです。

「使徒行伝」の時代、初代教会の頃は、「使徒行伝」が「聖霊行伝」と言われるほどで、聖霊が生き生きと働かれていて、聖霊によるみわざが力強くなされ、毎日、人々が救われていき、三千人・五千人と、日ごとに、クリスチャンの数がどんどん増えていったのですが、高山右近さんが、高槻城主だった、今から430年ほど前の高槻でも、聖霊による大いなるみわざ、聖書の記述そのままの、リバイバルのわざがなされていったのです。

毎日、人々が救われていきました。家族単位で救われていきました。そして、バプテスマを受けていきました。すべて、聖霊なる神の働きです。

これらのことは2000年前の話、400年前の特別な話であって、現代の日本は、その時とは状況が違う！ と思われますか。
主なる神さまは、「今のままでいいんだよ。よくやってくれている。今の日本は特別な状況なんだから、これで十分だ。
1億3千万人の日本人の99.5%以上の人たち・1億2千万人以上の人たちは、天国には入れない。全員、永遠のほろび・さばきに入ることになるけれど、それも、仕方のないことだ。これでいいんだよ。これで十分なんだよ。」
そのように、主なる神さまは思っておられると思いますか。

そんなはずは、絶対にありませんよね。
「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」とあるのですから。そして、そのために、御子イエス・キリストを十字架にかけ、すべての人の救いのために、道を開いてくださり、日々、一人一人を愛して、働きかけておってくださるのですから。

それでは私たちは、一体、どうしたらいいのでしょうか。私たちを宮とし、内住しておってくださる全能の、キリストの霊・聖霊なる神さま。教えてください。導いてください。——と祈るものです。

3つのことが、右近さんの頃・キリシタン時代の72%と、現代の1%未満、0.5%あるいは0.22%の違いである、と言えるのではないかと思いますと言いました。
①つめのことは、「祈りと、それに答える形でなされていった聖霊のみわざ」ということでした。

使徒たちも、主イエス・キリストから、「聖霊が臨まれるのを待ちなさい」と言われて、120名ほどの兄弟姉妹たちと共に集まって、「みな心を合わせ、祈りに専念していました。」祈りに専念して、約束の聖霊を待っていました。

私たちの主イエス・キリストも、朝早く、まだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられました。朝祷・朝の祈りの、よき手本を、私たちに示してくださいました。

髙山右近さんは、どうだったのでしょうか。
ルイス・フロイスという宣教師が、「日本史」という本の中で、次のように書き記しています。
「通常、雨・雪・寒さ・暑さを問わず、教会に最初に姿を見せるのは、きまって、ダリオとその息子たち（右近のお父さんのダリオ飛騨守と右近さんたち）であり、それは、主日・祝日も、平日も同じことであった。」 そのように記しています。

右近さんが高槻城主となった翌年に、高槻城内に教会堂が建てられました。
朝早く、カラン、カラン、カラン・・・ 鐘が鳴り渡ります。
その鐘の音を合図にして、キリシタン達が、次々と、高槻城内に建てられた教会堂に集まってきます。雨の日も、風の日も、寒く、雪が降っている日でも、まっさきに、一番に教会堂にやってくるのは、だれだったでしょうか？
それは、何と、高槻城主・髙山ジュスト右近と、右近のお父さんの、髙山ダリオ飛騨守の親子だったのです。

彼らは、早朝、教会堂に来ますと、ひざまずいて、「パーテル・ノステル」（主の祈り）を５回くり返して祈りました。つづいて、「天使祝詞・アベマリヤ」の祈りを祈りました。
更に各人が、それぞれの祈りを続けて祈っていきました。

来る朝ごとに、いつものように、祈りの家に共につどいて、主への薫香・祈り、当時のことばでいえば「オラショ」を、主なる神・デウスにささげ続けていったのです。

実は、「朝祷・朝の祈り」だけではありませんでしたよ。「夕祷・夕べの祈り」も、熱心に、忠実に、ささげておりました。
こうした、毎日の、毎朝・毎夕の、へりくだった、忠実な祈り、朝祷・夕祷に答える形で、ご聖霊が働かれ、みわざがなされていったのです。聖霊なる神による、リバイバルのわざがなされていったのです。

毎日、人々が救われていきました。家族単位で救われていきました。そして、バプテスマを受けていきました。すべて、聖霊なる神の働きです。
人が救われていくということは、聖霊なる神様の働きですから、聖霊を待ち望む「祈り・オラショ」なしに、救いのみわざはすすめられていかないのです。
高槻のキリシタン達は、聖霊の働きを待ち望む「祈り・オラショ」の実践者でした。その忠実な、毎朝・毎夕の「祈り」に答える形で、ご聖霊が大いなるみわざ・リバイバルのみわざをすすめていかれたのです。

右近さんの頃・キリシタン時代の72%と、現代の１％未満、0.5%あるいは0.22%の違いと言える②つめのことは、「信徒を中心とした教会形成」ということでした。

次々と人々が救われていきます。しかし、司祭の数は、わずかです。教会堂もありません。
それでは一体、どのような「教会」の形だったんでしょうか。

使徒行伝の時代・初代教会の頃も、まったく同じ状況です。というよりは、教会が発展していっている、クリスチャンが増えていっているということの中では、大体、同じようなことが言えるはずではないか、と思います。

ご聖霊による、救われる人たちが、まずあって、救われる人たちが次々に起こされて、その救われた人たち、クリスチャン・キリシタンになった人たちが集まる所、その集まりが「教会」であったわけです。
そして、そのキリシタン達が集まっている所・集まりに、丁度パウロやペテロが巡回していったように、わずかの司祭た

ちが、巡回・訪れていったということなのです。

現在の日本の教会の状況は、といいますと、教会堂もあります。牧師もいます。しかし、救われる人がほとんどいません。
チャン牧師が言われるように、「日本は今、リバイバルがない状態です。聖霊が働かれて、人々が救われていっていません。あっても、わずかです。

そういう状況の中で、既存の、教会の組織や制度やあり方を守ろうとして、牧師を中心として、教会役員もいっしょになって、しっかり固めていっています。そういうことに必死になっているのかもしれません。そして、そのことは、イエス様の教え・神のみことばからは、遠いのかもしれない。そして、そのために、力を失っていってしまっているのかもしれない。
―― もし、そうだとしたら、大変だ！という気がするのです。

初代教会の頃も同じだったと思うのですが、400年前のキリシタンの時代、どんどん人々が救われ、キリストの弟子となっていく中で、キリシタンの集まり・共同体が生まれていきますが、その中心となっていったのは、キリシタンの信徒リーダーたちでした。
各地で、いろんな呼び方がされていますが、「組の親」とか「親方」、あるいは「談義者」と呼ばれていた所もあります。

50人ぐらいの小さな組“小組”を作って、キリシタンの共同体が出来ていきます。キリシタンの集まり、それが「教会」なんです。
特別な教会堂があるわけではありません。定住している司祭がいるわけではありません。
キリシタン達は、組を作り、多くの小さな共同体に分かれて、自分たちの信仰を分かち合いながら、信仰生活をしていました。

それぞれの組をとりまとめている、組の親・談義者がいました。信徒の代表的な人たちが中心となって、その家屋敷にみんなが集まって、日曜日の礼拝・ミサをささげていきます。
主日の福音書（部分訳ですが）や信仰書を朗読し、説明します。みんなでお祈りをします。説教についての分かち合いをします。賛美の歌をうたいます。

週の途中の日には、お葬式・病人の訪問、結婚の司式・あるいは証人となる、子どもに洗礼を授ける、勉強会をして、教理書を何回もくり返し、暗記して覚えていく。
司祭が不在の中で、教会の中心・徹底して教会を守っている人が、「組の親」「談義者」と言われる人でした。
グループの50人にも、それぞれ役わりがありました。お金を扱う人、病人を見舞う人、教える人・・・などなどです。

高槻では、１万８千人のキリシタンでしたから、１組50人として、18000÷50で、360ほどの共同体としての教会があったことになります。
そして、その小組がいくつか集まって「大組」を作り、それぞれの大組に親がいました。

右近さんの頃には、お寺もどんどんキリシタンの集まりの場所となって、「教会」になっていきますから、20ほどの教会堂があったと伝えられています。
ということは、20ほどの大組があったことになります。

そして、更に、その大組が全部集まって「総組」を作り、「総親」（そうおや）と呼ばれる、全体をおさめている人・信徒がいました。
高山右近は、いわば、360ほどの小組、20ほどの大組からなる「高槻教会」全体の「総親」だったといえるのです。

キリシタンの集まる所が「教会」。そして信徒が、自分たちで教会を維持し、自分たちの共同体を作っている。その共同体がある所を、神父さんが巡回していくのです。
神父さんは、一人一人の信者たちに特別なことをするわけではありません。信徒のリーダー達と話をして、基本的な教えを伝えて、指導して、また次の所へ出かけていきます。

こういう教会のあり方なんですよね。そして、この教会は、力強い、キリシタンの数を、どんどん増やしていく、そのような教会だったんです。
上意下達的な、ピラミッドではないのです。逆ピラミッドなんです。
信徒たちがいて、その信徒たちと共に働く聖職者がいるのです。そうした中で、人々がどんどん救われ、又いっしょになって働くという、新しい神の民が作られていっているのです。

「教会は、信徒の組・共同体」 これが、キリシタン時代の教会が強く生き、迫害に耐えていった、殉教者を出すほどに生々とした、しかも、強固なものになっていった大きな原因があったのだ、と思われるのです。

キリシタン時代と現代の違いの、③つめのことは、「ご大切 / 大切に思う、ということの実践・愛の実践」ということでした。

救われ、生まれ変わったキリシタン達は、聖書から教えられた通りのみことばの実践、「ご大切の実践」「ご大切に思うことの実践」を、単純に・Simpleに、まっすぐに・Straightに、霊的に・Spiritualに、すすめていったのです。【3S】

時は戦国の世で、人々は、いろんな形で、「十戒」を平気で犯すようなことをやっていた社会であったわけですが、そのような中で、救われ、信仰をもったキリシタン達は、打って変わったような、以前とは全く別人のようになっていったのです。

神・デウス、そしてキリストをご大切にし、ご大切に思い、その同じ思いで、周りにいる隣り人（となりびと）を、キリストだと思って、ご大切にしていったのです。愛を実践していったのです。
十のまんだめんとす（十戒）や、ミゼリコルジア（マタイの福音書25章）の愛の実践・ご大切の実践をしていきました。

四人の妻や側室がいた武将は、一人を残して、他の3人と別れていきました。
寒さにふるえている兵士がいたら、自分のキモノをぬいで与えました。
戦さのために夫を亡くした妻には、配慮を与えました。　・・・・・・・等々々。

貧しい人の葬儀の時には、高槻城主である高山右近自身が、お父さんのダリオ飛騨守といっしょに、棺をかつぐということもしました。
当時、聖（ひじり）といわれた、サベツされていた人たちの仕事だったことを、城主自らがしていったのです。

時は、戦国時代のまっただ中です。殿様自身がそんなことをするなどということは、ありえないことです。
しかし、右近さんは、何も特別なことをしたわけではないのです。一人のキリシタンとして、亡くなった人をキリストだと思って、マタイ25章のご大切の教えを、実践しただけのことだったのです。でも、このことは、当時の日本の、戦国の世にあっては、考えられないほどのトテツもないことだったのです。

京都の、ある大学のお坊さんの先生は、このことについてたずねられて、
「城主だった高山右近の、こんな姿を領民が見たら、何も、キリスト教を押しつけられなくても、信仰をもつようになっていったとしても、当然のことだったと思いますよ。」
そのように、答えておられます。

このような、ご大切の実践を、高山右近だけではなくて、お父さんの飛騨守も、細川ガラシアも、すべてのキリシタン達が、まわりが殺伐とした戦国の時代に、又、いつ命をなくすことになるかわからない中で、天国・パライゾを思いながら、やっていったのです。

そして、主・デウスも、毎日、救われる人々を、どんどん仲間に加えていってくださったのです。

ここまでにして、又あとから、話し合いの中で語っていきたいと思います。

ありがとうございました。